



2011年 6月17日

みなさん、こんにちは。『酒と器展』は12日に終了。『小倉千尋展』はひきつづき、開催中です。

● 中学生が博物館で奮闘（トライやる・ウィーク）

当館での4日間の就業体験。初日に緊張した面持ちでやってきた面々は、とまどい驚きながら、少しだけ「働く」ことを体験しました。その様子の一部を、写真でご紹介しましょう。



初日：施設見学

空調や電気を管理する裏側の仕事が博物館の表の仕事を支えています。



2日目：受付

博物館の顔ともいえる受付を体験。お客さんが来ると、ドキドキ…



3日目：着付体験

恒例イベントの着付。やり方を習いながら、お互いに十二単や鎧を着せあいました。



最終日：常設展の解説

分担を決めて、常設展示の解説にチャレンジしました。時間のない中で自分なりに調べたりまとめたりして頑張りました。

● 講演会『文士の愛した酒器』

11日(土)午後、講演会が行われました。前日からの雨はあがり、60名の方が参加。講師は日本陶磁協会主任研究員の森孝一氏です。

評論家の小林秀雄や白洲正子などのものを見る眼について書いた文章が紹介され、彼らが愛した酒器を中心に、エピソードが語られました。

文士だけでなく、陶芸家の濱田庄司や俳優の緒形拳の話題にも触れ、緒形拳は見つめると心がしずまるといって大切にしていたやきものを売ったのを惜しんで、病になってから再び遠く山形までそれを見るために出かけたということなども話され、参加者は興味深げに聞き入っていました。

講師の森氏は、展覧会で見るだけでなく「絵ややきものなどを買って身近に置くことは、本質を見極める力を養うことにもつながる」と持論を話して締めくくりました。



講演会の様子(中央奥が講師の森孝一氏)